

つくりばなとうぜん 造花東漸

—中国から日本へ—

稻城信子

Tsukuribana spread to the East

はじめに

- ① 中国の年中行事にみられる「造花」
- ② 中国における「造花」の遺例
- ③ 「造花」の日本の展開
- ④ 「造花」成立の背景

【語文解説】

数年前からエジプト人や中国人は、「造花」の技術に優れていた。特にエジプト人は、亜麻の布や金属で花を作り、自然の生の花を用いて花冠を作らなかつた。また、古代中国人は銀や色絹で花を作つた。「造花」は「生」の「はな」の代用品として受容されていたのであらうか。「造花」の製作には、生花の歴史つまり花卉園芸の発達が底流にあり、それが相互に影響しつつ「造花」も流布していくたとおもわれ、単なる「生花」の代用品として「造花」を意味づけることはできないとおもわれる。

このような視点から、中国における年中行事にみられる「造花」や現存する「造花」「造物」の遺例について概観し、つづいて日本において、寺院で行われる「法会」(仏教行事)や宮廷の年中行事「灌仏会」等を通して、日本への流布の過程を考える。

「造花」「造物」は、中国の影響を受けて発展し、日本の展開をみていくが、「造花」成立の根底には、単なる「生」の「はな」の代りとしてではなく、「造花」「造物」を

通して、永遠の滅びることのない世界を表現したいという願望によるものであつた。